

特別栽培米と契約栽培野菜で地域振興を ～独立したい人、研修先に最適ですよ！～

阿久比町 (有)千姓 代表取締役 都築興治さん
作物 (米)、野菜

【平成 27 年 10 月 20 日掲載】

阿久比町において、特別栽培米「れんげちゃん」と野菜の生産を営む(有)千姓(せんしょう)の都築興治(つづきこうじ)さんをご紹介します。実家の家業を継いでまだ5年ですが、新規参入者の研修生を受け入れて就農支援を行いながら、農業と地域の振興を目指す若きリーダーです。

就農は自分で決めたこと

興治さんは稲作を営む農家の長男に生まれながら、大学生のころまでは農作業の手伝いを親から頼まれたことがほとんどなかったそうです。高校も大学も農業とは無関係の分野に進んでいたのですが、大学在学中に家業を手伝ううちに、農業に魅力を感じ、卒業するときには将来的に家を継ぐことを決めていました。このときのことを振り返り、「父が辛そうに農業をやっていたり、無理やり手伝わされた記憶がないから、自分から就農しようと決めることができた。上手く誘導されたのかもしれないけど。」と笑って話していました。



都築興治さん

就職先での経験が現在につながる

実家で習得できる稲作以外に、野菜栽培についても勉強したいと考え、3年間の契約で、山梨県にある株式会社サラダボウルへ入社します。この就職先では、野菜の栽培技術のみならず、人材育成や農業コンサルなどの知識も習得し、実際にそれらの経験もしました。この会社は年間100名程度の研修生を受け入れており、社員として研修生を指導する立場にあった興治さんは、人を使う側の大変さやノウハウ、研修生側の思いなどを知ることになります。このときの経験が、現在の千姓での研修生受け入れにつながっています。

千姓に入社、研修生の受け入れ開始

平成 23 年春に株式会社サラダボウルを退社し、家業の(有)千姓に入社します。入社してすぐに父重信さんが町会議員となったため、早速、興治さんが中心となって運営していくことになりました。稲作については、父重信さんに教えを請いつつ、野菜については、就職時の経験を活かして栽培を始めました。

さらに入社2年目の頃から、研修生の受け入れを開始します。興治さん自身がまだ栽培技術を勉強中の状態ではありましたが、「農業の世界に飛び込んでくる人を大切にしたい。その中には農業で独立したいという人も、社員として雇われて働きたいという人も色々な。どちらも



収穫した野菜を包装する研修生

大切にしたいし、一緒にやっていければいいかなと思って。」とのこと。ただし、研修生として受け入れるには、興治さんによる厳しいチェックがあります。面接と現場体験を行い、数日～数週間のお試し期間を必ず設けます。厳しい農作業を体験し、それでも続けていける人しか受け入れられないそうです。研修生として受け入れた人のうち独立を希望する人に対しては、1～2年の長期研修プログラムのあと、独立シミュレーションとして、実際に自ら計画を立て農業生産を1年間行ってから独立となります。厳しい研修を経験した卒業生であるため、その後もしっかり農業を営んでおり、千姓からの販売支援なども受けることができます。

特別栽培米「れんげちゃん」

千姓における大きな柱の一つが、特別栽培米「れんげちゃん」です。「れんげちゃん」は、消費者の求める米づくりをモットーに、昭和63年から地域で取り組み始め、千姓でも当時から栽培を続けています。レンゲを鋤き込んで基肥とし、本田では化学肥料を使わず、化学合成農薬を慣行より5割以上減らした特別栽培米で、「阿久比米れんげちゃん研究会」の会員によって生産されています。千姓では、米の消費量が減っている中で「れんげちゃん」をPRするためには、いろいろな選択肢があった方が良くと考え、「れんげちゃん」の米粉を利用したパスタやうどんの販売も開始しました。



特別栽培米「れんげちゃん」



左から「れんげちゃん」の米粉を利用したパスタ、うどん、「れんげちゃん」の発芽玄米



消費者と交流する研究会員

「阿久比米れんげちゃん研究会」は平成25年から、除草剤を含め化学合成農薬を一切使用しない「れんげちゃん黒」の販売を開始しました。千姓においても、「れんげちゃん黒」の栽培技術を確立し、栽培面積を増やしたいと考えているそうです。TPPなど、日本の稲作農家を取り巻く環境が厳しくなる中、「いかに差別化し、おいしい米を提供できるかが重要。」とのお話でした。

目標は、安定生産と、農業と地域の振興

現在、千姓の経営規模は、水稻40ha、野菜20ha程度となっています。野菜については、大手スーパー等との契約栽培をしていますが、供給が追いつかず、まだまだ増やしたいと考えているそうです。研修生が独立したあとの販売も支援する目的に加え、自社の販売量も増やしたいため、独立後も千姓を通して出荷できるようになっています。水稻・野菜のどちらにおいても、品質向上と安定生産が急務とのことでした。

最後に、「農家にとって、仕事が生活の一部ではだめで、農業が産業として成り立つようにしたい。農家が地域のためにボランティアで頑張っている部分が多いので、産業として無理なく維持発展できるような仕組みを作りたい。まずは千姓で雇用を増やすこと、さらには卒業していった研修生も含め儲けて、地域で人・物・金が循環できるようになるとうれしい。」と、農業と地域の振興への夢を語ってくれました。

執筆：農業経営課

取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課